

# 生活に与える影響

## 移転の影響

連絡路が本線から分岐する位置から開削ボックスとして地表から掘り下げて工事する必要があります。このため、開削ボックス区間では、移転の影響が生じます。このうち連絡路が地下にある区間では、工事後、埋め戻しをして地上を住宅や公園などに利用することも可能であると考えています。

	現都市計画 (高架構造)	地下構造の場合			
		各インターチェンジがある場合		各インターチェンジがない場合	
		開削ボックス と考えられる区間	シールドと 考えられる区間	開削ボックス と考えられる区間	シールドと 考えられる区間
世田谷区内	約330棟	約200棟 約270棟	約60棟	約130棟 約200棟	約110棟
狛江市内	約20棟	-	約20棟	-	約20棟
調布市内	約510棟	約180棟 約480棟	約30棟	約60棟 約150棟	約250棟
三鷹市内	約650棟	約280棟 約590棟	約60棟	約160棟 約340棟	約250棟
武蔵野市内	約240棟	-	約240棟	-	約240棟
杉並区内	約370棟	約60棟 約170棟	約200棟	-	約340棟
練馬区内	約890棟	約190棟 約550棟	約340棟	約130棟 約310棟	約550棟
合計	約3010棟	約910棟 約2060棟	約950棟	約480棟 約1000棟	約1760棟

注1) 地下構造の場合の建物数は、都市計画図を用いて、地下構造を想定し、以下の仮定で建物数を区市別に数えたもの。

- ・ICのアクセス位置・方法は、現都市計画のアクセス位置・方向と同じと仮定。
- ・本線の深さは(土被り)は、シールドで20m程度、開削ボックスで5m程度と仮定。
- ・連絡路は、勾配5%程度で地上とすりつけと仮定。
- ・開削ボックスと考えられる(地上を住宅や公園に利用可能な区間)区間は、連絡路が本線から分岐する位置から地表に出る位置までと仮定。
- ・開削ボックスと考えられる(完成後も地上の利用が困難な区間)区間は、連絡路から地表に出る位置からと仮定。

2) 内は、開削ボックスと考えられる区間のうち、完成後も地上の利用が困難な区間の建物数。

3) 開削ボックスと考えられる区間には、工事後埋戻しをして、地上を住宅や公園等に利用可能な区間と、地上部が連絡路等となり完成後、利用が困難な区間の2つのケースが考えられます。